

幼児と高齢者の交流における 絵本の活用についての一考察

青木 聡子

1. 問題と目的

(1) 幼児と高齢者との交流が求められる社会的背景

我が国は、世界有数の長寿国である。令和2年10月1日現在の総人口は1億2,571万人、うち、65歳以上人口は、3,619万人となっており、総人口に占める割合（高齢化率）も28.8%となった（内閣府，2021）。一方で、2020年の我が国の出生数は84万832人と、1899年の調査開始以来最も少なく、5年連続で減少している（厚生労働省，2021）。超高齢社会を生きる子どもたちにとって、高齢者は少なからぬ影響を与える存在である。だが、核家族化や人と人とのつながりの希薄化により、幼児にとって高齢者は身近な存在というわけではないことの方が多い。そのため、『幼稚園教育要領』（文部科学省，2017）の領域「人間関係」の内容に「(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」ことが示されるなど、幼稚園で高齢者との直接的な交流の機会を設けることが求められている。なお、『令和2年版少子化社会対策白書』によると、2018年に出産した母親の平均年齢は、出生順位別にみた時、第1子が30.7歳、第2子が32.7歳、第3子が33.7歳となっている（内閣府，2020）。幼児の祖父母は50～60歳代が中心となり、現役世代にあたる年齢の場合も多く（金森，2012b）、必ずしも「高齢者」には当たらない。

ところで、「高齢者」という用語には一律の定義がない。例えば、『令和3年版高齢社会白書』では、「各種の統計や制度の定義に従う場合のほかは、一般通念上の「高齢者」を広く指す語として用いる」としている。高齢社会対策大綱（平成30年2月閣議決定）（内閣府，2018）においては、高齢者の体力的年齢が以前に比べて若くなり、就業や地域活動など何らかの形で社会との関わりを持つことについても意欲が高いことに触れた上で「65歳以上を一律に『高齢者』とみる一般的な傾向は、現状に照らせばもはや現実的なものではなくつつある」ことが指摘されている。『幼稚園教育要領解説』（文部科学省，2018b，p.181）において、幼児が積極的にかかわる体験をもつことが望ましいとされる地域の人々の中でも最も重要な対象として、敢えて「高齢者」が挙げられていることを踏まえば、幼児と交流を行う「高齢者」には、「主な主体は高齢期に特有の

課題を抱える者全般を想定」(内閣府, 2018) することが妥当であろう。

(2) 高齢者との世代間交流の意義と課題

高齢者との世代間交流は、幼児に何をもたらすのだろうか。『幼稚園教育要領解説』(文部科学省, 2018b, p.19) には、幼児が豊かな人間性の基礎を培う上で貴重な体験を得るための重要な環境の一つとして、高齢者のための施設が挙げられている。また、将来のボランティア精神の基盤となる、人の役に立つ喜びを幼児期に経験させるためには、高齢者をはじめとする地域の人々と関わり、自分のできる手伝いをするなどにより、他者の役に立っているという満足感を得られるようにすることが大切である(文部科学省, 2018b, p.191) ことが示されている。そして、文部科学省が言うところの豊かな人間性には、OECD を始め世界各国が注目している社会情動的スキルのうち、「他者との協働」に関わる、社交性や敬意、思いやり(真田, 2018, p.52) が大きく関わってくると考えられる。

実際に、養護・特養老人ホームの高齢者と日常的に交流している幼児は、加齢により変化・老化が生じること、その変化・老化には個人差があることを認識しているという(王・中野, 2016)。また、幼児と高齢者の世代間交流について、保護者は、知育と徳育、保育者は、高齢者へのやさしさ等の徳育に有効であると認識していることが報告されている(徳田・請川, 2020)。

ところが、新型コロナウイルス感染症(COVID-10)の蔓延は、幼児と高齢者とが直接関わる機会の減少を更に加速させた。不要不急の移動自粛を呼びかける政府や自治体が「オンライン帰省」を啓発したことも記憶に新しい。ただし、馴染みのないデジタル機器の操作やアプリケーションソフトウェア等のサービスの利用に抵抗を覚える高齢者が少なからずいることは想像に難くない。そして、2021年12月の現在もなお、高齢者施設や病院等では、家族ですら面会がままならない状況が続いている。徳田・請川(2021)は、特別養護老人ホームとの合築や敷地内併設の幼稚園では、2020年時点でも窓越しの交流が行われていることを報告しているが、そのような物理的条件を兼ね備えた園は少ないだろう。

世代間交流の課題としては、感染症やセキュリティの問題を危惧する声があること(徳田・請川, 2020)や、そもそも保育者自身も高齢者と接触する機会が少なかったために、保育における世代間交流への抵抗感を覚えるケースがあることも報告されている(徳田・請川, 2021)。高齢者とふれあう機会が年に数回程度の行事として設けられている場合、

幼児が「何かをやらされている」と感じるのではなく、高齢者を理解することができる時間にする配慮や、高齢者を慰め見舞う対象としてではなく、共に生きる存在として捉えることができるようにすることが必要であるとの指摘もある（金森, 2012a）。よって、実際の幼児と高齢者との交流に向けて、今、何ができるのかを、現実的制約を踏まえたうえで検討する必要があるだろう。

(3) 本研究の目的

日常的な関わりを目指すには、対象への親しみを持つことが欠かせない。幼児が間接的に情報を得るためのツールとしては、絵本や紙芝居、タブレット端末などがある。そのうち絵本は、幼児が幼いころから親しみ、自分で繰り返し自由に触れることができるため、日常的な関わりにつなげていく上で最も適した媒体であると考えられる。

そこで、本研究では、幼児が高齢者に親しみを持つために有効だと考えられる絵本の分析を行い、その特徴を明らかにすることを目的とする。その際、「老い」は突然訪れるものではないこと、絵本では登場人物の年齢等が必ずしも明確に描かれるわけではないことを踏まえ、近い将来「高齢者」になると想定される、幼児にとっての祖父母についても併せて取り上げることとする。橋本（2020）は、幼児が保護者と共に絵本の読み聞かせを聞いて対話を行うことが、社会情動的スキルの育成につながる可能性があることを示している。本来であれば直接的な交流の実施が望ましいのは言うまでもないが、幼稚園で高齢者との交流に関する絵本を読み聞かせてもらうことは、高齢者に関心をもち、相手に応じた関わり方を考えるきっかけになるのではないだろうか。また、高齢者と対面での交流活動を行う場合であっても、事前に目的に合わせて選んだ絵本を活用することにより、より一層教育的効果を得ることが期待できると考えられる。

2. 方法

本研究では、幼児と高齢者との交流に向けた活動に利用することを想定し、国立情報学研究所（NII）が提供する情報サービス Webcat Plus で、2021 年 11 月 7 日現在、「(お) じいちゃん」「(お) じいさん」のいずれかのキーワードに該当した絵本作品のうち、次の 3 つの条件を全て満たした 14 冊を分析対象とする。なお、「(お) ばあちゃん」「(お) ばあさん」についての議論は、別稿に譲る。

条件 1：幼稚園児が負担なく読めるもの（読み聞かせを含む）。

領域「言葉」には、「教師や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親

しむ中で、幼児は新たな世界に興味や関心を広げていく。」ことが示されている（文部科学省，2018b，p.223）。「老い」という、自身が経験したことのない状態を想像する際、絵から得られる情報は大きな手掛かりとなると考えられる。また、既に述べたように、幼児にとっての絵本は、自分から繰り返し関わることができる手に取りやすい媒体でもある。繰り返し関わることで、登場人物により親しみを持ったり、物語の世界をより深く理解したりすることが可能になると考えられることから、年長者に読み聞かせてもらう場合を含め、負担なく読めることを条件とした。

条件2：入手が容易であるもの。

教材として活用するのであれば、園内でいつでも手に取れる状態にあることが望ましい。したがって、本稿では、入手し易さを重視し、絶版のもの・出版社在庫がないものは対象外とした。

条件3：幼児（あるいは、それに準ずる幼い子どもや小動物等）と高齢者との交流の様子が描かれているもの。

読み聞かせ後の実際の交流活動につなげやすいよう、本研究では、幼児（あるいは、それに準ずる幼い子どもや小動物等）と高齢者との交流の様子が描かれているものを取り上げることとする。現行の『幼稚園教育要領』で初めて示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「(5) 社会生活とのかかわり」には、5歳児の後半になると、高齢者を含めた地域の身近な人と触れ合う体験を重ねる中で人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになることが示されている（文部科学省，2018b，p.62～63）。社会生活を意識した高齢者との交流活動は小学校の学習でも重視されており、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編』（文部科学省，2018a）にも、「内容（4）公共物や公共施設の利用」の解説として、「…幼児，高齢者，障害のある人など，多くの人が利用していること，そうした多くの人が利用しやすいようにするための利用方法やきまり，それを支える人々の存在があることに気付いたりすること（p.37）」が示されている。また、同じく「内容（8）生活や出来事の伝え合い」には、「特に生活科においては，児童が，身近な幼児や高齢者，障害のある児童生徒などの多様な人々と触れ合うことを大切にしている。（p.46）」ことが明記されている。

山崎（2014）は、同じ題材を異なるアプローチで多様に描いた絵本を体験することは、初めての題材に出会う体験より効果的に対象とのかかわりを演出することが期待できるとしている。そこで、『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、2018b）に示された、高齢者との関わりを通じて経験させたい「相手の気持ちを考えて関わること」（p.62～63）「自分が役に立つ喜びを感じること」（p.62～63）「幼児の心を揺り動かすような豊かな体験」（p.133～135）、「周囲の人たちと関わり合い、支え合って生きているのだということを実感すること」（p.181）、「自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験」（p.191～192）、「相手の役に立つことをする経験」（p.191～192）の視点から絵本を分析し、複数を組み合わせて教材として活用することを提案する（表1）。加えて、社会情動のスキルのうち、「他者との協働」に関わる、社交性や敬意、思いやり（真田、2018、p.52）についても検討し、その際、「社交性」については、「⑤共に楽しみ、共感し合う体験」、「思いやり」については、「①相手の気持ちを考えて関わること」と同質のものとして扱うこととする。

3. 結果と考察

以下では、（1）高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本、（2）高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本、（3）高齢者への敬意が描かれた絵本の順に、絵本の概要に触れながら幼児が高齢者に親しみを持つために有効だと考えられる絵本の内容分析を行い、その特徴を明らかにしていく。

（1）高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本

最初に、幼児と高齢者という立場の違いはあるものの、世話をしている・されているという感覚がない共に遊ぶ場面などの対等な関係が中心に描かれている絵本を取り上げることとする。

『ちさとじいたん』（坂田寛夫：詩／織茂恭子：絵／岩崎書店／1997年）

「じいたんは、「ちさのおじいちゃん」ではありません。」というカバーの折り返しから始まる詩の絵本である。『なまえ』（p.2～3）という詩からは、「じいたん」というのは「ちさちゃんが じいたんと よんだから」で、「じいたん」のお父さんとお母さんは「じいたんと よばなかったよ たろちゃんと よんだよ」という言葉を受けて「たろちゃん」と呼びかけると「はい」で終わる。季節の移ろいと共に白髪の老人と幼い女の子との交流が描かれている。

表1 幼児と高齢者との交流が描かれた絵本に含まれる内容

絵本の題名／作者／出版社／発行年	①相手の気持ちを考えて関わること・思いやり	②自分が役に立つ喜びを感じること	③幼児の心を揺り動かすような体験	④周囲の人たちと支え合って生きているのだと実感すること	⑤共に楽しみ、共感し合う体験・社交性	⑥相手の役に立つことをする経験	⑦敬意
『ちさとじいたん』（坂田寛夫：詩／織茂恭子：絵／岩崎書店／1997年）				○			
『きめてよ、おじいちゃん!』（ジャン・ルロワ：文／ジャン＝リュック・アングルベール：絵／ふしみ みさを：訳／光村教育図書／2014年／2015年）					○		
『おじいちゃん』（ジョン・バーニンガム：作／たにかわ しゅんたろう：訳／ぼるぷ出版／1984年／1985年）		○		○			
『うさこちゃんのおじいちゃんとおばあちゃん』（ディック・ブルーナ：ぶん・え／まつおか きょうこ：やく／福音館／1988年／1993年）	○	○		○	△	△	
『うさこちゃんのおじいちゃんへのおくりもの』（ディック・ブルーナ：ぶん・え／まるおか きょうこ：やく／福音館／2009年／2009年）	○	○			△		
『きりかぶのきりじいちゃん』（なかや みわ：さく／小学館／2020年）			△		△		
『きりかぶのきりじいちゃんときりばあちゃん』（なかや みわ：さく／小学館／2020年）			△		△		
『じいちゃんバナナ ばあちゃんバナナ』（のし さやか：作・絵／ひさかたチャイルド／2017年）				○		○	
『マラソンじいさん』（西本鶏介：作／福田岩緒：絵／すずき出版／2019年）				○		○	
『たまごにちゃんとたまごじいちゃん』（あきやま ただし：作・絵／鈴木出版／2019年）		○	△		△	○	
『いいから いいから』（長谷川義史：作／絵本館／2006年）	△				△		△
『おじいさんならできる』（フィービ・ギルマン：作・絵／芹田ルリ：訳／福音館書店／1992年／1998年）				○		○	
『じいじのさくら山』（松成真理子：著／白泉社／2005年）	○	△	○		○	○	○
『おじいちゃんのごくらくごくらく』（西本鶏介：作／長谷川義史：絵／すずき出版／2006年）	○	△	○		○	○	○

○…含まれるもの／△…自覚的ではなかったり、一部含まれていたりするもの

血のつながりががない高齢者との日常的な交流が描かれる絵本は極めて珍しい。「しらないおばさん」が「じいたんを ひっぱっていっちゃいました」（p.21～22）という描写や、雪の中、ちさが「じいたんは こない」と、ずっとじいたんを待ち続ける姿（p.23～24）からは、ふたりが互いに家を行き来したり、（保護者を介して）連絡を取り合ったりする間柄ではない可能性がうかがえるが、そのことによって、却って、二人の温かい関係が強調されている。まさに、地域の高齢者とのかかわりである。しかも、ちさの

言葉にしばしばとぼけた返事をするじいたんは、ちさのことを温かく見守りながらも、決して何かを押し付けるわけではなく、また、ちさも具体的に何かをじいたんから学ぶような描写は一切ない。ただ、季節の移ろいと共にふたりの日常が語られていく、最もシンプルで、しかし、交流の原点となるような関わりが描かれた絵本である。

『きめてよ、おじいちゃん!』（ジャン・ルロワ：文／ジャン＝リュック・アンゲルベール：絵／ふしみ みさを：訳／光村教育図書／2014年／2015年）

主人公の「ぼく」は、「おじいちゃんが めんどくさく みてくれるから」毎週のようにおじいちゃんの家に行くのだが、何をするにも「わしは どっちだって いいよ。」と委ねてくることに困っている (p.1)。しかし、おじいちゃんが自分が「ぼく」くらいだったころのことを思い出し (p.13)、思い出を辿りながら、かつて自分が祖父にしてもらったことを「ぼく」に提案するようになってから、関係性に変化が見られる。迎えに来た母親から「ねえ、そろそろ すいようびは うちで るすばんしてみたら? もう ひとりでも だいじょうぶでしょ?」と、祖父の家ではなく、自宅で一人で留守番することを提案された「ぼく」は (p.25)、「いいね! そしたら おじいちゃんを うちに よべるね」と答える (p.27)。

この絵本の「ぼく」は、おじいちゃんに何でも委ねてもらえることが面白くない。それは、対等に扱われたいという気持ちの表れであると考えられる。まだまだ年長者に面倒をみてもらうことも多い年齢の子どもであるからこそ、作中でおじいちゃんに提案したことが通り、提案される側になったことの意味は大きい。このように、ある種の対等な関係を築けたことは、「共に楽しみ、共感し合う」(文部科学省, 2018, p.191～192) ことができるようにするうえでの第一歩となるといえる。高齢者を、慰め見舞う対象としてではなく、共に生きる存在として捉えることができるようにする(金森, 2012a) ことが重要であるのと同様に、幼児の側も、一方的にケアされるだけの存在に留めておかenないことが、立場の異なる者の共生を考えるうえでは重要なのではないだろうか。

『おじいちゃん』（ジョン・バーニンガム：作／たにかわ しゅんたろう：訳／ぼるぶ出版／1984年／1985年）

おじいちゃんの家遊びに来た孫娘が、おじいちゃんと共に過ごす姿がリアルに描かれている。そして、終盤「おじいちゃんは きょうはそとであそべない。」(p.25～26) と、体温計や氷嚢、薬と共に、このページのみおじいちゃんが一人で描かれる。続くページでは、おじいちゃんの膝に乗って「あした」の遊びを提案する孫娘が描かれているが (p.27～28)、次の見開きでは、おじいちゃんがいつも座っていたソファは空になり、それを一人ぼっちで見つめる孫娘の絵だけが描かれ、最後は乳母車を一人で押す孫娘の姿で終わる。

出版社が提示している対象年齢は4歳からとなっているが、繰り返し読むなかで、あるいは、より月齢の高い子どもが読むと、孫娘とおじいちゃんとの対等でしあわせな関係に終わりがあることや、おじいちゃんの「老い」に気付くことだろう。おそらく、多くの幼児は孫娘と同様に、「あした」＝未来の存在を信じて疑うことはない。しかし、「高齢者」との「あした」は、いつまでもは続かないのが現実である。この作品は、限られた時間を共にどう過ごすのか、ということを考えるきっかけにもなると考えられる。

(2) 高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本

次に、幼児（あるいは、それに準ずる幼い子どもや小動物等）が高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本を取り上げる。

『うさこちゃんのおじいちゃんとおばあちゃん』（ディック・ブルーナ：ぶん・え／まつおか きょうこ：やく／福音館／1988年／1993年）

うさこちゃんのことを「だいの だいの だいすきで うさこちゃんが くと おおよろこび」するおじいちゃんとおばあちゃんを訪ねたうさこちゃんが（p.1）、おじいちゃんから手作りのすくーたーをもらい（p.5～6）、おばあちゃんに編み物を教わって、初めて編んだショールをおばあちゃんにプレゼントすると「まあ、きれい。よくできたこと。それに たっぷりしていて あたたかい。おまけに わたしのだいすきな あかいいろ」と「おばあちゃんは おおよろこび。」してくれる（p.13～18）。

『うさこちゃんのおじいちゃんへのおくりもの』（ディック・ブルーナ：ぶん・え／まるおか きょうこ：やく／福音館／2009年／2009年）

ふわじいちゃんの誕生日の贈り物を「いっしょうけんめい かんがえて そうだ わたしが なにか いいものをつくってあげよう」と思い付いたうさこちゃんは、（p.1～4）、「まえに おばあちゃんに おしえてもらった あみかたを おもいだしながら」マフラーを編む（p.5～12）。贈り物を受け取ったおじいちゃんが「これは ありがたい。うれしいねえ。くびが さむくて こまっていたんだ。これが あれば もう さむくない。どうも ありがとう うさこちゃん。」（p.23）と喜んでくれたところで物語は終わる。

繰り返し触れてきたように、幼児期、特に5歳児の後半には、高齢者などの地域の身近な人と触れ合う体験を重ねる中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ（文部科学省、2018b, p.62～63）られるようにしたい。おじいちゃんやおばあちゃんの自分への関わりをモデルに、相手のことを思っていることを実践する姿には、家族の愛情に気付き、その家族を大切にしようとする気持ち（文部科学省、2018b, p.191）がわかりやすく表現されており、幼児が自ら

の祖父母のことを考えるきっかけにもなる作品だと考えらえる。

『きりかぶのきりじいちゃん』（なかや みわ：さく／小学館／2020年）

物語の冒頭では、「すっかり やくたたずになってしまったなあ……」と嘆くきりかぶの「きりじいちゃん」が描かれているが（p.4～5）、うさぎのきょうだいやこりす、あり、こねずみ、はりねずみ、ねずみたちと交流するなかで「じぶんが やくたたずではないことに きがつき」、これからは木ではなく『きりかぶ』として みんなを よろこばせようと おもいました。」（p.31）という決意が描かれ、「とても たのしい まいにちです。」という言葉で締めくくられる。

続編として『きりかぶのきりじいちゃんときりばあちゃん』（なかや みわ：さく／小学館／2020年）があり、「きりじいちゃん」と「きりばあちゃん」とのおしゃべりを実現するため、こりすやこねずみ、うさぎのきょうだい奮闘する（p.10～21）。後半は、「きじいちゃん」と「きりばあちゃん」の会話が構成され、「いまが いちばん しあわせなのかもしれませんね！」という（作者の言葉として帯にも引用されている）台詞で物語は終わる（p.22～32）。

切り株になって、役立たずになってしまったと嘆く「きりじいちゃん」をよそに、動物たちは、先入観を持たずにいろいろとお願いをしてくる。幼いから、老いたから、と一方的にケアされる側になるのではなく、相手のことを思っていることをしていくなかで、誰かの役に立つ喜びを感じていくことを描いたこの作品は、幼児が高齢者と関わる際の最も基本的で大切な姿勢を学ぶ上で有用であると考えらえる。

（3）高齢者への敬意が描かれた絵本

ここでは、高齢者への敬意、あるいは憧れが描かれた絵本を取り上げる。

『じいちゃんバナナ ばあちゃんバナナ』（のし さやか：作・絵／ひさかたチャイルド／2017年）

まだまだ青い「バナナくん」は、たくさんの熟した「じいちゃんバナナ」と「ばあちゃんバナナ」が、次々と見事に変身していく姿を見て、「わあ、すごーい。みんな かっこいい。」と憧れを抱く（p.22）。そして、「ぼくは どんな じいちゃんバナナに なろうかな。」（p.24）と、「じぶんが じいちゃんバナナに なったとき」を思い浮かべて「ぼくは どんな じいちゃんバナナに なろうかな。」と、考えながら眠るというシーンで終わる。

『マラソンじいさん』（西本鶏介：作／福田岩緒：絵／すずき出版／2019年）

かけっこが大好きなこういちくんが公園に行くと、若者がバイクに乗って飛び込んで来る（p.9～p.10）。そこへ、「あたまの しろい おじいさん」が現れ、若者を叱る、出会いの物語である（p.11～12）。若者とマラソン競争で勝負をして、こういちくんと小学1年生のゆうたくんが「すごい！」「かっこいい！」（p.21～22）と叫ぶ程の走りを見せたおじいさんは、実は、園長先生のパパで「まえの えんちょうせんせい」だったことがわかり（p.27）、これから始まる交流への余韻を残して物語は終わる。

「かみが まっしろで、かれきのように やせている」(p.19) のに、「かぜのように」「まるで マラソンせんしゅみたい」に (p.19) 走っていくおじいさんや、老人性色素斑を思わせるシュガースポットがたくさん現れ「じゅくして」「いい いろ」になった (p.2～3) “じいちゃんバナナ” や “ばあちゃんバナナ” は、見かけこそ老いているのだが、いずれも優れた能力を持っており、憧れの対象として描かれている。特に、『じいちゃんバナナ ばあちゃんバナナ』は、完熟した“じいちゃんバナナ”や“ばあちゃんバナナ”達の方がより魅力的に描かれることで、純粹に、年を重ねたおじいちゃん・おばあちゃんはずいと思わせる力があるストーリーとなっている。

『たまごにいちゃんとたまごじいちゃん』(あきやま ただし：作・絵／鈴木出版／2019 年)

筆者自身が表紙カバーで『孤独』を抱えて生きてきた老人が、老いと向き合います。」と述べている本作では、「ほんとうは もう たまごから でていないと いけない」たまごにいちゃん (p.1) が、たまごのままのおじいさんと出会い、積極的にかかわっていく。たまごじいちゃんは「じゃあ せっかくだから あんたの まえで からを わってみようかのう」(p.19) と言って、たまごにいちゃんが止めるのも聞かずに、本当に殻を割ると「う～ん、じつに きもちが ええ。これも あんたの おかげじゃな」(p.22) と、感謝を述べ「みずの うえを とぶように はしり、おおきな かわの むこうぎしまで あつというまに はしりぬけ」で行ってしまう (p.25)。そして、「とおくで てんのようにちいさくなった おじいさん」は、大きな声で「あんたも いつかは たまごの からを わるじやろうが、あわてることは ないんじゃ！それまで いっぱい あまえて たのしむと ええ！」(p.26～27) と、なんとも含蓄のある言葉を残す。それを受けて「『わらない わらない！ばく まだ ぜったいに わらないも～ん！』そういいながら、つよくたくましくなった おじいさんを ちょっと うらやましいと おもった たまごにいちゃんでした。」(p.28) という文章で物語は終わる。

ついさっきまで、自分と同じ立場だったたまごじいちゃんが、殻を割ることで遠い存在になったかのように描かれているが、たまごにいちゃんが卵のままでいたいその気持ちを誰よりも理解して、ありのままの姿を受け止めてくれるのもまた、たまごじいちゃんであり、赤の他人だからこそ冷静に、しかし、同類だからこそ共感的に、たまごにいちゃんに寄り添ってくれる。たまごじいちゃんが殻を割ることができたのは、たまごにいちゃんのおかげであるという構図は、殻をつけたままの自分にもできることがあるというメッセージであるのと同時に、自分もいつかは殻を割ることができるという希望にもつながっていると考えられる。

『いいから いいから』（長谷川義史：作／絵本館／2006年）

ほくとおじいちゃんのところにやってきたかみなりのおやこを、おじいちゃんは「いいから、いいから」ともてなし、全てを笑顔で受け入れていく。かみなりおやこが帰り、郵便でおへそも戻ってきて（郵便料金を支払ったのはおじいちゃん）（p.15～16）、最後のページは、おばけをもてなすおじいちゃんが描かれ、『いいから いいから 2』（長谷川義史：作／絵本館／2007年）へと続く（p.23）。なお、このシリーズは、2021年12月現在『いいから いいから 5』（長谷川義史：作／絵本館／2018年）まで刊行されている。

作者の長谷川義史氏は、「いいから いいから」という言葉について、絵本館のウェブサイトで「せかいを へいわにする ほんきの あいことば」、「みんなが えがおになる あんたファーストのあいことば」だと述べている。この作品では、浮き出たあばら骨やおでこや口元のしわが絵に示される以外は、あくまで「ほく」との関係性の上でのおじいちゃんとして描かれている。何事にも動じず「いいから いいから」と受け入れていくおじいちゃんの懐の深さは、単に、年を重ねたというだけでは説明がつかないのだが、かみなりおやこを受け入れるおじいちゃんに倣って「ごゆっくり ごゆっくり」（p.2～3）と、一緒にもてなすほくの姿からは、おじいちゃんの生き様への敬意や憧れが感じられる。

『おじいさんならできる』（フィービ・ギルマン：作・絵／芹田ルリ：訳／福音館書店／1992年／1998年）

ヨゼフが赤ちゃんのときにおじいさんが縫ってくれたブランケット（p.2）がやがて古くなると、「ふうむ、どれどれ」と言いながら、おじいさんが繰り返し「ちょうどいいもの」へと作り変えてくれる。古くなるたびに「おじいちゃんなら きっと なんとかしてくれるよ」と、おじいさんのもとを訪ねるヨゼフだが、ある日とうとう、ボタンになったかつてのブランケットをなくしてしまう。「ごんねんだけど」（なにも できない）と、おじいさんはさびしそうに首を振るが（p.26）、ヨゼフは「ふうむ、どれどれ」と、「おじいさんと おなじように いいながら」「ちょうど いいものが できるんだ——」とペンを取り（p.27）、「ほら、ほくと おじいさんの このすてきな おはなし！」（p.28）と書き上げた原稿を誇らし気に掲げたところで物語は終わる。

本作では、物とそこに込められた思いを大切にするおじいさんの姿勢がヨゼフにしっかりと受け継がれていく様子が一貫して描かれている。そして、形あるものがなくなってしまった時に、ヨゼフ自身がおじいさんとの交流をおはなしにまとめる姿からは、ヨゼフがおじいさんを愛し、尊敬する気持ちが見て取れる。

『じいじのさくら山』（松成真理子：著／白泉社／2005年）

季節の移ろいとともに山での「おれ」と「じいじ」との交流が描かれ、冬になったところで「じいじが びょうきに なりました」（p.11～12）と場面転換を迎える。「いつもとおんなじ おやすみなさいの あと ことんと ねむった じいじは もう めを さましませんでした」（p.28）と、明確に死が描かれ、「じいじのつくった さくら山」でのほろのまつりの風景で物語は終わる（p.29～31）。

『おじいちゃんのごくらくごくらく』（西本鶏介：作／長谷川義史：絵／すずき出版／2006年）

物語の前半は、「おふろにつかるとき、くちぐせみたいに『ごくらく ごくらく』と言う（p.9～10）、ぼくが大好きなおじいちゃんとの日常が描かれ、おじいちゃんは「こんどの おやすみが きたら、ゆうたと ふたりで やまの おんせんに いこうか」と（p.11～12）約束をする。ところが、「おじいちゃんの こしが きゅうに いたく」なったため、入院することになり、温泉行きは中止になる（p.15～16）。このページから、お父さんやお母さんの表情が陰しくなり、おじいちゃんの容態が思わしくないことが暗に示されるなか、ぼくも「おかあさんに たのんで ゆうめいな おんせんの おゆに なる こなを かってもらい、ゆぶねの なかへ まきました。」と、何とか、おじいちゃんが喜ぶことをしようと行動する（p.17～18）。「げんきに なって もどってくると いったのに、おじいちゃん は びょういんから ほとけさまの く にへ」行ってしまい、泣いている僕に、お母さんが「おじいちゃん は ほとけさまの く にでも 『ごくらく ごくらく』と いって くらしているよ」と言う（p.25～26）。「おゆに つかると、おじいちゃん の まねをして『ごくらく ごくらく』」と言う僕の姿が最後に描かれ、「おじいちゃん の やさしい かおが うかんできて、ちょっと かなしいけど、とても しあわせな きもちに なれます。」という言葉（p.27）で物語は終わる。

弱っていく祖父のために、何かできないかと「じいじの びょうきを なおしてください」と、「なんべんも なんべんも」さくらの木に頼む「おれ」（p.15～18）や、入浴剤を用意する「ぼく」（ゆうた）（p.17～18）のように、相手のことを思いやることを疑似体験することができる絵本である。

また、核家族が多いことや、自身の祖父母はまだ若いこともあって、多くの幼児は人の死とは無縁の生活を送っていることが予想される。しかし、相対的に死に近い高齢者との関わりに際し、死別後も残されるあたたかい場所や受け継がれる思いがあるということを知っておくこともまた、高齢者との交流の準備として必要なことなのではないだろうか。

4. 全体的考察

本研究では、(1) 高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本、(2) 高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本、(3) 高齢者への敬意が描かれた絵本の順に、絵本の概要に触れながら幼児が高齢者に親しみを持つために有効だと考えられる絵本の内容分析を行った。その結果、「(お) じいちゃん」や「(お) じいさん」との交流が描かれた市販の幼児向け絵本には、『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、2018b）に示されている「①相手の気持ちを考えて関わること・思いやり」、「②自分が役に立つ喜びを感じる」、「③幼児の心を揺り動かすような体験」、「④周囲の人たちと支え合って生きているのだと実感すること」、「⑤共に楽しみ、共感し合う体験・社交性」、「⑥相手の役に立つことをする経験」に加え、「⑦敬意」といった要素が含まれることが確認された。ただし、「④周囲の人たちと支え合って生きているのだと実感すること」が、幼児の立場から明確に描かれているものは見当たらなかった。この背景には、そもそも、教材として開発されたわけではない市販の絵本を分析対象としていること、幼児向けの絵本というページ数上の制約から、取り上げることができるエピソードのボリュームに限りがあること、実感という言葉に象徴されるように直接体験を伴う理解が必要な内容であることがあると考えられる。

しかし、既に述べたように、幼稚園で高齢者との交流に関する絵本を読み聞かせることは、あくまで、高齢者に関心をもち、相手に応じた関わり方を考えるきっかけにすることが目的であり、真の学びは直接交流にこそある。絵本を通して題材の性質そのもの、題材と主人公である子どもとの関係など題材を多様に描くことにより、絵本の題材としての対象と子どもの関わり方に多様性を持たせることが可能になる（山崎、2014）という指摘を踏まえると、高齢者との関わりを描いた絵本を実際の交流活動のねらいに応じて選んでいくことが大切だといえる。実際の交流活動の際に、幼児が、高齢者というラベルにとらわれずにその人のよさを捉え、相手のために自分にできることを考えることができるよう、適宜、絵本を生かしていきたい。

なお、肉体的機能の衰えや認知症などを描いた高齢者の身体的精神的特徴への理解を促す内容の絵本については、今回は児童期以降を対象としたものしか見つけることができなかった。高齢者の特徴への理解を促す上で必要な経験については、今後の検討課題である。

引用文献

絵本館 長谷川義史の絵本 <https://chonkan.co.jp/tag/> 長谷川義史 / （2021 年 12 月 9 日アクセス）
橋本忠和（2020）絵本の読み聞かせによる社会情動的スキル育成の可能性についての一考察 北海

道教育大学紀要教育科学編, 70 (2), 321-332.

金森由華 (2012a) 高齢者と子どもの世代間交流活動の課題: 幼稚園・保育所での活動を中心に 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集 (12), 9-13.

金森由華 (2012b) 高齢者と子どもの世代間交流: 交流内容を中心に 愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇 (2), 69-7.

国立情報学研究所 Webcat Plus <http://webcatplus.nii.ac.jp/> (2021 年 11 月 11 日アクセス)

厚生労働省 (2021) 令和 2 年 (2020) 人口動態統計月報年計 (概数) の概況 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei20/index.html> (2021 年 12 月 5 日アクセス)

文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) フレーベル館.

文部科学省 (2018a) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説生活編 東洋館出版社.

文部科学省 (2018b) 幼稚園教育要領解説平成 30 年 3 月 フレーベル館.

内閣府 (2018) 高齢社会対策大綱 https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p_honbun_h29.pdf (2021 年 12 月 4 日アクセス)

内閣府 (2020) 令和 2 年版少子化社会対策白書 https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2020/r02webhonpen/html/b1_s1-1-2.html#zh1-1-07 (2021 年 12 月 7 日アクセス)

内閣府 (2021) 令和 3 年版高齢社会白書 <https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html> (2021 年 12 月 4 日アクセス)

王 姿月・中野 いく子 (2016) 世代間交流が 幼児の高齢者親に及ぼす影響 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 27 (0), 86-96.

真田美恵子 (2018) 第 2 章 学習環境, スキル, 社会進歩: 概念上のフレームワーク 経済協力開発機構 (OECD) (編著) 無藤 隆・秋田喜代美 (監訳) 社会情動的スキル: 学びに向かう力 明石書店 Pp.47-67.

徳田多佳子・請川 滋大 (2020) 保育における幼児と高齢者の世代間交流: 幼稚園の保護者・保育者に対する調査から 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科 (26), 149-157.

徳田多佳子・請川 滋大 (2021) 幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科 (27), 165-173.

山崎英二 (2014) 月刊絵本『ちいさながくのとも』の分析研究 越谷保育専門学校研究紀要 (3), 50-59.

注

- (1) 社会情動的スキルには、「目標の達成」に関わる, 忍耐力, 自己抑制, 目標への情熱, 「他者との協働」に関わる, 社交性や敬意, 思いやり, 「感情のコントロール」に関わる, 自尊心, 樂觀性, 自信といった下位構成概念が含まれており, 人生のあらゆる段階で重要な役割を果たす (真田, 2018, p .52)。